

梓川支川前川における天明二年（1782）の天然ダム形成（シブナギの崩壊）について

国土交通省 北陸地方整備局 松本砂防事務所 小口 貴雄, 渕別 光¹⁾, 後藤 晃宏²⁾
 一般財団法人砂防フロンティア整備推進機構 井上 公夫, ○中根 和彦, 竹内 智志
 株式会社防災地理調査 今村 隆正, 雨宮 圭吾
 1)現 北陸地方整備局河川部 2)現 松本市

1.はじめに

天明二年六月九日（1782.7.18）、長雨の影響で大野川村（現松本市）のシブナギで大崩壊が発生した。崩土は梓川支川である前川に流れ込み（図1）、天然ダムを形成した。天然ダム上流にあった大野川村の集落は家屋が湛水し、家屋33軒を押し流した。

崩壊地の対岸には、崩壊土砂が押し出したことにより「突き上げの原」といわれる平坦地ができ（図2）、その後の大正年代には、その場所に小学校が建設された。現在、小学校は移転したが、突き上げの原は今も残っている。また、シブナギの下流にある松本市稲核では、江戸時代に発生した山抜け（大規模崩壊）についての記録（図3）があり、シブナギの災害についても記載があった。

本研究では、シブナギの崩壊について、文献調査と現地調査を行い、天然ダムの形成状況、湛水範囲、湛水量、災害伝承について報告する。

2.天明二年（1782）シブナギの崩壊を示す文献

南安曇郡誌改訂編纂会（1968）によれば、天明二年六月（1782.7）に山崩れのため前川が満水になり、家を33軒（棟数60棟余）押し流したとある。「入り四カ村書付 第二十七集」によれば、同月九日（1782.7.18）に長雨のため大野川村で山崩れが発生して、川の流れを留めてしまい、段々家屋が水底になっていったとある。また、福島・長沢（1986）によれば、旧大野川小・中学校（図4左上写真参照）は、前川の谷に面した「突き上げの原」（図4参照）と呼ばれる小広場にあり、対岸のシブナギの山が崩れて前川を埋め、さらに対岸にまで土砂が押し出してできた所とある。

現在、シブナギ直近の前川沿いに集落は見られないが、大正元年測図の旧版地形図を見ると集落が位置しており（図4左図参照）、文献の内容と合致した。このため、これら文献の記載事象は、天明二年六月九日（1782.7.18）のシブナギの崩壊を示していると判断した。

3.湛水面積、湛水量の推定

シブナギの崩壊による天然ダムの規模は、「突き上げの原」が天然ダムの痕跡であることから推定した。



図1 シブナギ位置図

「突き上げの原」は標高1,045～1,050mであることから、少し低い標高1,040mを天然ダムの満水位と推定した（図2）。湛水域は図4に示すとおりであり、前川沿いの過去の家屋の多くが湛水域に入っており、文献の事象と一致した。この結果からシブナギの天然ダムは、湛水高約40m、湛水面積約7.6万㎡、湛水量約103万㎡と推定できた。

「入り四カ村書付 第二十七集」によれば、この天然ダムは翌日に決壊したが、粘土質であったため、一気に切れることはなく、緩やかに切れたため、大出水にはならなかったとあり、家屋被害は上流湛水の影響がほとんどであったと推察される。

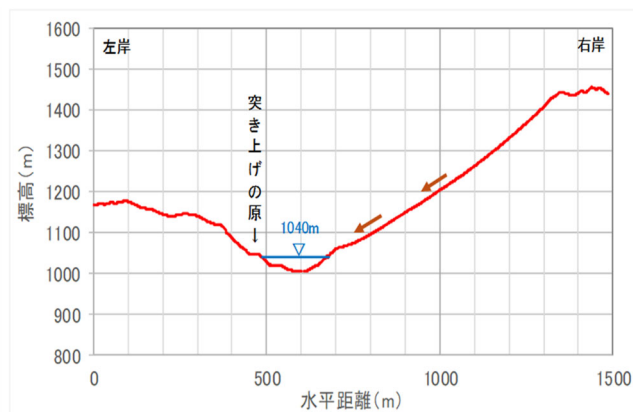


図2 シブナギ崩壊の断面図

4.災害伝承について

図3に示す「所々山抜け之事」は、当該地より下流の稲核集落に伝わっていた山抜け（土砂災害）の

記録であり、寛政十三年(1801)に作成されている。毎年正月に書き換え、山崩れ等の災害への関心が薄れないようにしていたと伝えられている。これは、現在でも見習うべき風習と言える。この中に「大野川地拔」とある記載は、発生年の記載が1年違っているものの、シブナギの崩壊のことを指していると推定される。また、「神口猿倉山抜」は元文三年(1738)の上高地 玄文沢の崩壊、「中山砥畑山抜」は宝暦七年(1757)のトバタ崩れを指していると考えられる。



図3 所々山抜ケ之事 (松本市立博物館所蔵)

5. おわりに

シブナギの崩壊は、これまでまとまった文献が無かったが、いくつかの文献を繋ぎ合わせることで、その位置や規模、災害事象を推察することができた。また、当該地下流の住民が、過去の土砂災害を子々孫々に伝承するために工夫を凝らしていたことが分かった。

土砂災害を他人事ではなく、「我がこと」と認識してもらおう、過去の土砂災害を調査するとともに、その災害を地元住民に知ってもらい、防災力向上、避難啓発に活かすことが重要と考える。

引用文献

- 松本市役所安曇支所蔵：入り四ヶ村書付 第二十七集
松本市立博物館所蔵：所々山抜ケ之事
活断層研究会編(1991)：新編日本の活断層一分布図と資料一，東京大学出版会，437p.
福島立吉口述/長沢武編著(1986)：北アルプス乗鞍物語，ほおずき書籍，247p.
南安曇郡誌改訂編集会(1968)：南安曇郡誌，第二巻下，792p.

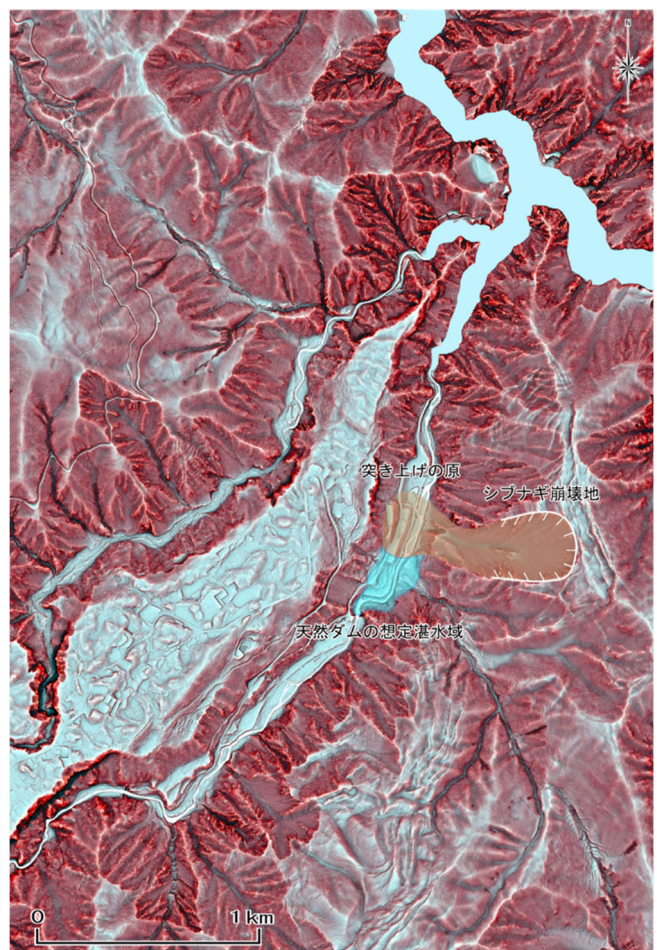


図4 シブナギの崩壊と天然ダム(左：地理院地図「標準地図」 右：赤色立体地図)
断層位置は活断層研究会(1991)に基づく